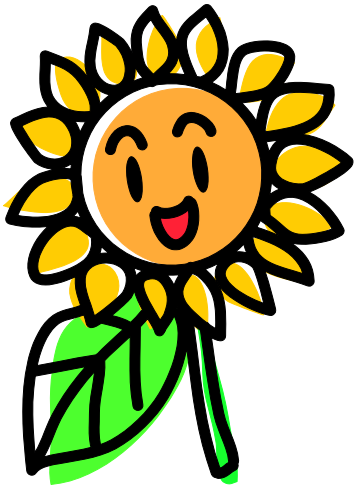
バスで行く！
摂津市歴史探訪

ガ イ ド

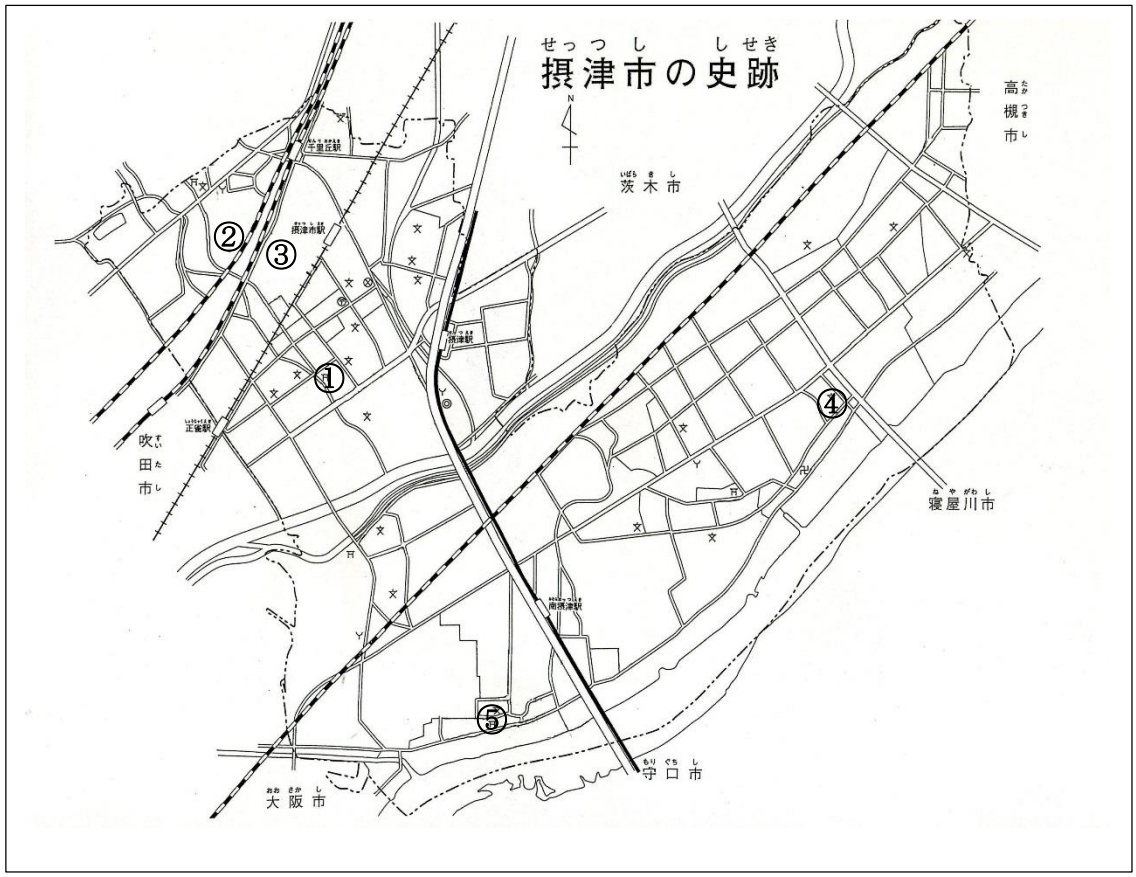


平成２６年６月２１日（土）

摂津市教育委員会　生涯学習課

バスで行く！　摂津市歴史探訪　文化財ガイド

史跡紹介



① 味舌天満宮（三島3丁目）

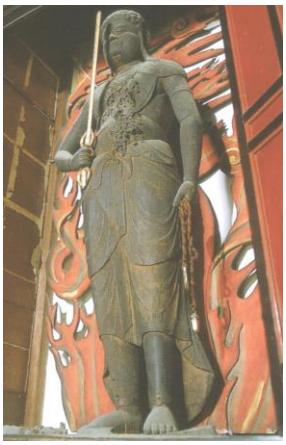
味舌天満宮は、寛永12年（1635年）に織田尚長により造営された神社です。織田尚長は、茶道有楽流としても有名な織田長益（織田有楽斎）の五男で、味舌の地で生まれました。

味舌天満宮　本殿

味舌天満宮には、味舌天満宮本殿と摂社八幡神社本殿の2つの社殿があり、細部の様式や擬宝珠銘も同じ建物です。建物は正面の柱の間が一つしかない一間社流造で、桧皮葺の屋根の庇に沿って付けた板「破風」に特徴的な装飾が施されています。

味舌天満宮本殿と摂社八幡神社本殿は平成5年11月24日に大阪府指定有形文化財に指定されました。

② 金剛院（千里丘3丁目）



金剛院　不動明王立像

金剛院は摂津市内唯一の真言宗の寺院です。寺伝によると天平10年（738年）、一老翁が、遊歴の僧行基に珍しい菓子を差し上げながら、「この地は霊地なり一寺の建立を乞う」と言い、消え去ったといいます。これにより行基は薬師如来を刻み、本尊とし、放光山味舌寺と名付けました。

平安時代末頃、この地に賊徒が現れた時に、本尊の薬師如来に祈念したところ、蜂の群れが現れ賊徒を退治したという伝承があります。今も寺内にはその時に戦った蜂を供養した「蜂塚」があります。これにより、寺名は蜂熊山蜂前寺金剛院と改められました。

当寺の護摩堂には、昭和45年2月20日に大阪府指定有形文化財に指定された不動明王立像があります。不動明王立像は寄木造りの等身像で、江戸時代の「摂津名所図会」にも記されています。弘法大師の作と伝えられていますが、その手法から平安時代後期の作と推定されます。

③ 弥栄の樟（千里丘東5丁目）

弥栄の樟

天保14年（1843年）の嶋下郡味舌郷の図面に「金剛院持」と記されている弥栄の樟は、かつてこの地も金剛院の一部であったことを物語っています。聖武天皇の天平年間（729～749年）の植樹という伝承があります。昭和初期の味舌村では、この木を「弥栄の樟」と命名して、厚く保護しました。

弥栄の樟は、平成元年に「大阪みどりの百選」の一つに選ばれています。

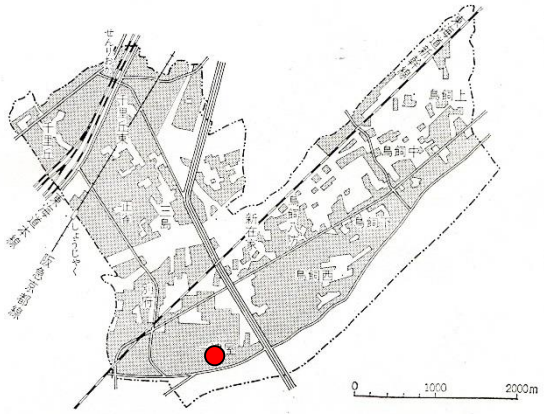
④ さわやか広場とりかい（鳥飼下1丁目）

さわやか広場とりかいの建物は、昭和11年に建設された旧鳥飼村役場を改装したもので、平成25年4月13日に開所した建物です。建物の前には実正樋と呼ばれる樋門石が置かれています。実正樋は、鳥飼上一丁目にあった非常に古い樋門で、16世紀中頃には存在が確認されており、淀川の水を農業用水として利用するうえで欠かせないものでした。建物の横には旧教育研究所別館と呼ばれる文化財収蔵庫があります。この収蔵庫には遺跡の発掘調査により発見された遺物や、民具や農具などの文化財が保管されています。

⑤ 旧一津屋公会堂（一津屋2丁目）

（1）　建物の誕生

旧一津屋公会堂　外観



旧一津屋公会堂　位置図

旧一津屋公会堂（摂津市立第6集会所）は、淀川堤防沿いの摂津市一津屋2－18－13に所在する建物です。建物のすぐ脇には、味生神社という由緒ある神社があります。

大正2年（1913年）に芝居小屋として建築され、当時は旅回りの劇団や地元青年団の芝居などが盛んに行われていたようです。

建物は平成23年6月15日に、第1号の摂津市指定有形文化財に指定されました。摂津市が、この建物を指定した根拠の一つには、建物の希少価値が上げられます。大阪府において、大正時代にさかのぼる芝居小屋で、現存しているものは、旧一津屋公会堂の他、現在確認されていません。この建物が現在も壊されずにこの場所に建っているのは、地域の人々によって長く大切に守られてきたあかしです。

旧一津屋公会堂のすぐ近くには宮ノ下渡し跡という文化財の説明看板があります。宮ノ下渡し跡は、戦国時代の永禄年間（1558～1570）に存在していたことが知られる古い渡し場です。昭和29年の鳥飼大橋の完成まで使用されていました。

宮ノ下渡し跡　顕彰札

渡し跡は、旧一津屋公会堂のある場所と、となりの守口市大庭とを結んでいた渡しで、川幅も約550mあったと伝えられています。旧一津屋公会堂の建っている場所は、摂津市と大阪市や守口市とを結ぶ交通の要所であったようです。当時は今より堤防も低く、道々には出店が立ち並び、賑やかに人々が

行き交っていた風景が想像できます。大正2年、この建物が建てられた背景には、こうした立地条件が要因の一つであったと考えられます。

(2)建物の沿革

建物は大正2年、一津屋公会堂として誕生しました。地元の芝居好きの農家、約160世帯がお金を出し合って作った、地元が生みだした建物です。昭和43年に一津屋の部落総代から市が建物の寄付を受け、市の所有する建物となりました。昭和47年には現在の名称である摂津市立第6集会所となります。

建物が建ってから戦後しばらくまで、旅回りの劇団や地元青年団の芝居などが行われていましたが、テレビなどの普及により、昭和56年の青年団の公演を最後に芝居上演がなくなりました。しかし、「大正時代の面影を残す公会堂を地域の財産としてアピールしよう」と、地元自治連合会の方々が中心となって、平成7年に39年ぶりとなる芝居が上演されました。また、平成11年にも出し物が行われました。これが最後の芝居公演となり、現在は地元の集会所として利用されています。

(3)建物の構造

建物内部の様子

黒御簾（くろみす）

建物は木造2階建て、1階面積222．95㎡です。屋根は日本瓦葺き、外壁は板を若干重ねるように貼る、鎧張りともいわれる構造です。これは板のつなぎ目の防水が目的となっています。収容人数は約250人です。旧一津屋公会堂は芝居小屋の機能を備えている点が最大の特徴ですが、その他に、一部建物に洋風の構造を取り入れている点も特徴の一つです。明治時代に、洋風建築の知識が日本に入ってきますが、具体的な中身までは、なかなか良く分からなかったようです。そこで、当時の流行である和風建築の中に洋風建築の要素を取り入れるといった工夫がなされるようになります。旧一津屋公会堂も、そうした当時の流行である洋風建築の要素を一部取り入れています。

芝居小屋の機能としては、舞台を有していること、楽屋として利用できる地下室があること、桟敷席があること、黒御簾があることの大きく4点が上げられます。桟敷席とは2階に設けられた観覧席で、1階の観覧席に比べ、一段高い位置から舞台を見下ろすことができます。黒御簾とは、舞台上手側にある黒い板で囲われた部屋です。ここでは演技のタイミングにあわせて、芝居効果を高める長唄が歌われたり、効果音として太鼓、鼓などの楽器が演奏される音響施設です。このように旧一津屋公会堂は、大正時代の芝居小屋のたたずまいを現在に残している貴重な建物といえるでしょう。

洋風の屋根飾り

作成　摂津市教育委員会事務局　生涯学習部　生涯学習課